

調ちゃんオカルト世界
麻雀戦記（仮）

かやちや

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

麻雀というものが、そもそもマイナーな競技であることは疑いようのない事実である。

確かにプロ団体は存在しているし、世界大会のようなものも開かれている。

けれどそれはプロ野球やJリーグのように認知度が高いものではなくて、どちらかといえばマニアックな世界といえるほどの狭いものでしかなく。

世間一般のイメージからして、大人が嗜む遊びの一つといった程度の認識だ。

須賀調（すがしらべ）は、そんな常識が通用する世界で生まれたごく普通の少女であった。

目次

- | | | | |
|-------------------|----|-------------------|----|
| 第01局：発端@旧校舎の開かずの扉 | 1 | 第07局：従姉@お子様はお姉さま？ | 63 |
| 第02局：遭遇@在りし日の部室にて | 10 | 第08局：邂逅@懐かしき人との再会 | 74 |
| 第03局：迷走@極めて常識的な危惧 | 23 | 第09局：編入@私と彼と幼なじみと | 86 |
| 第04局：過去@考える事を止めた日 | 30 | | |
| 第05局：選択@伸るか反るかの一択 | 44 | | |
| 第06局：原点@ここから始まる物語 | 52 | | |

第01局：発端@旧校舎の開かずの扉

「おーい、須賀あ」

帰り支度を済ませてさあこれから家に帰るぞー、と言うところで急にそう呼び止められた。

振り返るまでも無く声をかけてきたのが誰なのかというのは分かっている。

間の抜けた感じのおっさん声で私を苗字呼びするだなんて、どう考えても担任の山本先生以外には考えられない。

故にげんなりとしてしまう心をなんとか表情の内に仕舞い込んでから、ゆとりを持った笑顔と共にゆつくりと振り返った。

「あら先生、ごきげんよう。私に何か御用でしょうか？」

「まあ用が無いのに呼び止めはしないな。ついでにいうとお嬢様口調はお前にや似合わないよ」

「うっさいな」

自分でも多少気にしているんだから、そうハッキリと言わないで欲しい。

このおっさんが一言多いのはいつものことだけど、それがやたらと私に向けられてい

る気がするのは何故だろうか？

さてはあれか。

この親譲りの金色の髪が不良っぽくて気に入らないとか、そういう古臭い教師倫理的な発想から生み出された間違った認識のせいなのか。

そういえば父も昔は髪の色でやたら不良扱いされて軽く凹んだという話をしてくれたっけ。

そう考えれば理不尽な話ではあるのだが、さつさと本題を終わらせて家に戻りたいので適当にスルーしておく。

「で、何の用ですか？」

「お前今日な、俺の授業で宿題忘れてただろうか？　まさかその事実まで忘れたわけじゃないだろうな？」

「……あつ」

そんなこともありましたっけね。いやあ、すっかり忘れてましたよ今の今まで。

……なんてことを素直に言わなかった自分を、まずは褒めてあげたいと思う。

それが隠しきれているかどうかは別にして、だ。

「……忘れてやがったな？」

「ハテ、ナンノコトヤラ」

「ったく。お前いつもそんなだからなあ……ああ、まあそれはいいわ。それよかちよつと頼まれてくれ」

「えー」

「えー、じゃねえの。ほれ、これを旧校舎の物置部屋まで運んどいてくれたら今日のこと
はなかったことにしてやるぞ」

何故か呆れ顔で、手に持っていた一冊の本を半ば強引に手渡してくる。

いわゆるハードカバーと呼ばれる分厚い表紙のそれには、一目でそれとわかる位置に
はタイトルが書かれていない。

とはいえれつきとした製本なのだから、図書室にでも返しに行つて来いと言われるの
ならば分からなくはないけれど。

「……旧校舎の物置部屋つて、あの一番奥のこの開かずの間のことですよね？」

「そうだな。俺が学生だった頃から開かずの間なんて呼ばれてるが、実際はただの物置
部屋のあそこだな」

「うへえ」

せつかく隠していたはずのげんなり顔がここに来て飛び出してしまった。

だつて仕方がないじゃないか。

通称『開かずの間』と呼ばれるその物置部屋は普段から嚴重に施錠されており、一般

生徒がまず立ち入る事の無い場所なのである。

故に、実しやかに囁かれるのは決まって学校の怪談よろしく誇張された怖い話だったり、学校についての妙ちくりんな噂だったりするのだ。

どちらにしる確な話ではないことは字面を読んだだけでお分かりであろう。ただ今の問題はそこではない。

こともあろうに！

この冴えない担任教師殿は！

か弱い一生徒でしかないこの私に！

一人でそこへ行つてこいと言っているのだ！

「この人でなし！」

「何とでも言え、負け犬め。ほれ、鍵これな。あとあんま中を荒らすんじゃないぞ」

問答無用。問答無用である。

いくら宿題を忘れたからといって、こんな仕打ちが許されても良いのだろうか!?

「少なくともお前さんのご両親は笑って許してくださるだろうよ」

で、その後に申し訳なきように先生に向けて頭を下げる母親の姿までが見えている私は流石といわざるを得ない。

この時点で、断るといふ選択肢が最初から用意されていないことに遅まきながら気が

ついた。

その部屋は、ほぼ無音の薄暗い廊下を抜けた先にある。

数年ほど前に新築で部室棟が建てられたこともあり、今ではほぼ使用されることが無くなってしまった旧校舎。

私なんかはさつさと壊してしまえば良いのに、と思わなくもないのだけど。

そこはそれ、かつてそこで過ごした思い出がわんさどあるであろう卒業生の皆さん的には多少考えることもあるようで。

古くなった備品なんかを保管しておくための倉庫代わりとして、現在は使われていたりする。

今はしんとして物静かな空間でしかないけれど、昔はもつと活気が満ち溢れていたのだろうと想像するだに感慨深い——わけがなく。

さつさと用事を終わらせてこんな辛気臭い空間からはオサラバしたいものである。

——カチャリ。という音を響かせて、扉の鍵が下りた。

自分自身の手で、開かずの扉が開かれる。

ずいぶんと古めかしい音とともに開かれていく扉の向こう側には——なんとも不可思議な光景が存在していた。

「……何故ベッド？」

最初に目に付いたのは、部屋の片隅で埃を被ったセミダブルのベッドだった。

無論、シーツが敷かれてたりもしないので、そこで誰かが寝泊りをしているというわけではないだろう。

保健室あたりで使われていたものを運び込んだのか。にしては年季が入っているようにも見受けられるのだが。

一步、部屋に足を踏み入れる。

長い間放置された倉庫なんかに漂っているようなカビや埃の饅えた匂いは、不思議と感じられなかった。

誰かが小まめに手入れをしているのかもしれない。

そこでふと我に返って、ここに来た目的を思い出す。手の中に握られたままの本を、片隅で埃を被っていきそうな本棚へと戻しておいた。

しかし、これが開かずの間の正体というのはちよつと拍子抜けな感が否めない。それが正直な今の思いである。

流石に血糊があちこちに飛散しているような光景は有り得ないだろうけれど、少しはそれっぽい雰囲気があるものだとばかり思っていたのに。

それどころかむしろ、ここを大切にしているだろう『誰かさん』の暖かさを感じて、心

が落ち着いていくのを感じる程だ。

いつそこを私の秘密基地にしてやろうか。

「山本先生が、つてわけじやなさそうだけど。あの人なんかそういうのやらなさそうだし……ん？」

呟いて、ふいに逸らした視線の先。

西に傾いた太陽の光が、窓にかけられた遮光性カーテンのわずかな隙間から零れ落ちて照らし出したのは。

「麻雀牌、だよな？ あれ」

その光の指す場所に近づいてみる。

色々なダンボールが積み重ねられている部屋の片隅、小さめのテーブルの上に置かれていた麻雀用の小道具たち、その一つがそれだった。

様々な模様が書かれている牌のうち、唯四つ、何も書かれてはいない真っ白な牌。

綺麗に纏められたその一式は、手入れがなされているのだろうか。光を受けて未だキラキラと輝いていた。

「綺麗だけど、いいのかなこれ」

品行方正な大人を育てるべく開かれた教育の現場に、賭け事の印象が強い麻雀の道具が置かれているというのがまず違和感である。

この学校で教鞭を振るっていた、あるいは今現在も振るっているであろう教師陣の中の誰かの私物——なのだろうか？

まさか、夜な夜な教師達の間で徹夜麻雀大会が開催されていたりする？

ああ、それで「開かずの間」なのか。

あえてそういう噂を流すことで、生徒たちを近づけないようにする。あれらは全て汚い大人の計略だったというわけか。

——謎はすべて解けた！

「なんつって。ま、私も小さい頃から牌は触ってたしね……主に積み木扱いだったけど」賭博の一部であったり。雀荘の喫煙風景であったり。徹夜であったり。脱衣であったり。イカサマであったり。e t c e t c

世の中に広まっているイメージとしてはあまりよろしくない麻雀ではあるけれど、こゝと須賀家においてはそうでもない。

両親が好きだからというのものもあるのだろう。普通に我が家には麻雀セットが存在し、小さい頃から遊んでいた記憶があった。

逆に小さい頃友達が麻雀のことをほとんど知らなかったことに衝撃を受けたくらいである。

もつとも、詳しいルールなんかを理解したのは中学二年生になった頃のことだ。

それまでは牌を積み木代わりにして母からお小言を頂いたり、おはじき代わりにして弾き飛ばした牌が父に直撃して怒られたりと、一般的な扱いはしていなかったけどね。「でも、君たちはきつと持ち主の人に大事にされてたんだろうな」

こんなところに置き去りにされているのは、どうしてなのか分からないけれど。心の中でそう付け足して、輝きを残す牌の一つを手を取った。

「——っ!？」

その瞬間だった。

世界が、私という存在の全てが白い光に包まれたのは。

時間にしてどのくらい経過したのかは、正直言つて分からない。

呆然とする私の手のひらには、持ち上げた白い牌がそのまま握られていて。

モノクロの中に沈んでいたはずの世界——いや、この部屋の中は、過ぎ去ったはずの時間いりどをいつの間にか取り戻していた。

第02局：遭遇@在りし日の部屋にて

「……はっ」

いけない、思わず自失してしまっていた。

我に返ってまず最初に。

今の光は一体なんだったんだろう、なんて考えるよりも先に浮かんできたのは、ここはいったい何処だ？という至極まっとうな疑問であった。

というのも。

ついさつきまで私は思わず眉を顰めてしまいそうなほど古ぼけた、まるでモノトーンでも張られているかのような静寂に満ちた世界に一人閉じ込められていたはずだ。

いやまあ実際は閉じ込められていたのではなく、お使いで足を運んだに過ぎないけれども。

ともかくそこは、現役を退いた老兵士のようにくたびれた様相を見せた部屋だったはずである。

しかし、今はどうだろう。

綺麗に張り替えられたであろうシートが敷かれたベッド、部屋の中央に置かれた全自

動卓と思わしきテーブル。

部屋の片隅には幾つも型の落ちた風に見える旧式のパソコン、おそらくは部活動のスケジュールの書かれたホワイトボード、などなど。

あちらこちらに今現在使用されているんだぞ、と思わせる現役の匂いが満ちていて、先ほどと同じ部屋であるはずなのに受ける印象はまるで真逆だった。

これつてもしや、白昼夢？

いやいや、それならばまだ普通に寝ながら夢でも見ているというのが一番あり得る状況である。

朝起きてご飯を食べて学校に行つて授業中に宿題忘れて怒られて……その罰ゲーム的な感じで開かずの部屋に本を返しに行かされた、というところまでが全部夢。

……うん、有り得ない。

実際に見てもいない部屋の中を夢に見るほど鮮明に思い描くなんてこと、私に出来るはずが無いではないか。

ならばいつそのこと逆転の発想で、あの出来事があつた後に見ている夢である可能性が微粒子レベルで存在するということに……？

しかしそうならば、私はあのまま部屋を出て鍵をかけ、先生に鍵を返したあと家に帰つて着替えをし、ペットのカピちゃんに餌をあげながらモフモフしつつ、帰ってきた

母と一緒に夕ご飯の支度をし、父が帰ってきてから揃って食事、お風呂に入ってからお気に入りの布団に包まれてご就寝した——ということになるのだが。

……正直ひとつも覚えていない。

てことは、だ。

一番考えたくない可能性ではあるけれど……部屋まで足を運んだのは現実であり、あの光に包まれた時、何らかの要因で私は気を失った。

で、あの普段は誰も来る事がないであろう古ぼけた部屋の中で、今も私は一人床に突っ伏して眠りこけている、と。

考えているだけで気が滅入る。さっさと目を覚まさない——と思いつつ、どうやれば目が醒めるのだろうか？と首を捻っていた時のことだ。

「ふう、今日も疲れたわねえ……って、誰——？」

肩をこきこき鳴らしながら、部屋の中に一人の女生徒が入ってきたのは。

私が着ている制服とは少しばかりデザインが違う——けれど、確かにそれはここ清澄高校指定の制服である。

首に巻かれたタイの色と形を見るに、伝統に則って考えればまず間違いなく最上級生のはずだ。

「っ！ も、もしかして貴方、入部を考えていたりするのかしら!？」

「えっ」

ガシツ、と肩を掴まれる。

「いやー、今年はほんつと当たり年ね！ あの二人だけじゃなくて、もう一人入ってくれることになるなんて！」

「いや、ちよ」

「私は部長の竹井久。見ての通りの三年生よ、よろしくね！」

「あ、はい。よろしくお願——え、いやいやそうじゃなくてあのですね——」

ぐいぐい押し込んでくるその人——竹井先輩とやら——に圧倒されつつも、なんとか言葉を捻り出す。

「……つてそもそも、何部なんですか？」

「え？」

ちよつと痛いなあ、と思つてしまうほど力強く握られていたはずの手から、力が抜ける。

ついでにキラキラと輝いていたはずの彼女の瞳からは、一瞬にして光が消える。

「知らない……つてことは、入部希望者じゃない？」

「はあ、残念ながら」

「ですよね……」

こくりと頷いたのと同時に、がっくりと項垂れた。

「……まあ分かりきつてはいたんだけどね。新入生が入ってきてから早一ヶ月、今頃部員が増えることなんて早々無いってことくらいは」

あからさまにしよげ返っているその人を見ると、全然まったく悪くなんてないこの私を以つてしても、罪悪感なるものを抱かざるを得ない。

そもそもそんなに貧窮している部活ってなにかあつたらうか？

廃部寸前だったはずの文学部はたしか、新しく赴任してきた美人先生が顧問となった結果、男子生徒急増で見事に窮地を脱したと聞いた。

あと危なそうだったのは手芸部か演劇部あたりが——と普通に考え込もうとして、そもそもこの事態が既に普通じゃないんだつたと唐突に思い出す私である。

廃墟同然といつてもいい旧校舎をあえて部活動に使用しているところなんてあるはずがないし、そもそも学校側が許可を出すとは思えない。

で、あれば。

夢か現か幻か——なんてフレーズがよく似合う、何一つ普通じゃないこの状況において、彼女らの今後の行く末を真剣に憂いてあげる必要はないのではなからうか？

うん、そうだ。きっとそうに違いない。

「じゃ、すみませんが私はこれで」

「そう。それじゃ——つて、違う違う。ウチの部に用事がないんなら、どうして貴方はここにいたのかしら？」部長としてそれはきちんと聞いておかないとね」

「えっ？ あ、いや、それは……なんていうか、不慮の事故？といますか」

「んー……？ 怪しいわねえ。まさかとは思うけど——空き巢的なことを？」

「してませんよ！ 何いきなり言い出すんですかつ」

「ふふ、ごめんなさい、冗談よ」

「冗談にしてももうちよつと可愛らしいのとかあるでしょ？ ったく……」

なんの証拠もなくいきなり容疑者扱いだなんて、まったく失礼な話である。

私でなくともぶんすこーと怒りたくなるのも当然だろう。

……だけど、なんだろう？

何故かすごく、この人のことを知っているような気がするんだけど。あれはどこで

……。

「それにしても、あなた——あまり記憶にない顔ね？」

「同級生とかならともかく、入学してからまだそんな経ってないんだからそんなの当然じゃないですか？」

というか、私なんて未だにクラスメイトの名前と顔が一致しないことだってあるくらいだが。

机周辺から離れた場所にいる男子なんかは特に。

「それもそうか。でも、上手く言えそうにないんだけど……んー、なにかしらねえ、この違和感」

「そんなことを言われましても……」

つて、マズイ。

この人のペースに引きずりこまれたらいけないと、私の内に眠っている何かが必死になつて働きかけてきている。

なんとというか、遺伝子そのものが警鐘を鳴らしているレベル。

ここは早めに退散してしまったほうが良いかもしれない。いや、そうするべきだ。

正直イレギュラーなことばかりが発生して頭はまともに廻っていないが、危機的状況を潜り抜けようとする生存本能はなんとか正解を引き当てることに成功した。

「と、とにかく私は先生に頼まれて本を返しに来ただけで。それが終わつてから麻雀牌が目に入ったので、ちよつと見てみようと思ついたら先輩が」

「本？ ああ、あれか。まったく先生も一応顧問なんだから自分で返しに来ればいいのに、生徒を使うなんて……」

頷いて本棚をちらりと見やったところをみるに、心当たりがあつたらしい。よかつた。

ただ、最後に「私にも言うことを無条件で聞いてくれる後輩とか現れないかしら」という恐ろしい独り事が聞こえてきたような気がするけれど、きつと気のせいだろう。

「そういうことならご苦労様。紅茶をご馳走してあげましょう、そこに座って待っていてください」

「あ、いえ。父からも早く家に帰って来いって言われてますんで、今日はこれで」

「あらそう？　そういうことなら仕方がないか。ま、『今日は』ってことは明日も来てくれるんだろうし、ねっ」

「言葉の綾です。来ませんよ？」

「えー、つれないわねえ。まるで入部したての頃の和みたい」

「のどか？」

「ウチの部員の一人よ？　原村和、名前もそうだけど過去の実績とか外見とかでもそこそこ有名なはずなんだけど、知らない？」

「原村……和？」

「おや？　その名前、どこかで聞いたことがあるような……何かのテレビ番組だったっけ？」

「ああ、うん、たしかそうだ。」

「原村、はらむら……原村議員、じゃないな。原村先生、もしつくり来ない。原村選手、

違う。原村アナ……アナ？　といえ、アナウンサーのことで。

「あー、あーっ！　って竹井久!？」

「うわっ！　び、びっくりした。なんでそこで急に私の名前なのよ!？」

いやいやいやいや、ちよつと待った。

言われてみればそうだ。原村和って名前もそうじゃないか。

政治経済バラエティドキュメンタリーとなんでもござれ、通称『久ペディア』こと売れっ子博識アナウンサー、竹井久。

可愛すぎる弁護士として法曹界から芸能界まで余すことなく名を馳せる『法のおねえさん』ことアイドル弁護士、原村和。

この二人のことを知らない人はたぶん日本にいない。それくらい連日連夜、テレビに出ている人たちの名前である。

……そういえばたしか、竹井アナは清澄出身だったっていう話をどこかのサイトで読んだことがあったっけ。

しかし、原村弁護士はたしか東京の超有名進学校出身で、清澄とは縁も所縁もなかつたはず……いや、ちよつと待て私。

「……」

少しだけ冷静になって考える。

私を知っている人とは別人だけど、同姓同名——というのが一番有り得る可能性だろうか。

目の前のこの人も？

……いや、認めたくはないけれど、たしかに竹井先輩は竹井アナとそっくりだ。

それこそ『若かりし頃』というフレーズがぼつちり嵌りそうなほど、見た目なんかそれはもう紛うことなく同一人物である。

それに加え、この部屋の現状というのも考慮に入れるのであれば。

考えたくもない可能性が脳裏を過る。

私はもしかして、今——とんでもない場所にいるのではないか——？

「ど、どうかしたの？」

「……いえ。すみません、やっぱり私はここで失礼します——」

これ以上ここにいるのは危険だ。

それを肌で理解している私は、彼女の制止を聞かずにその部屋を飛び出した。

使われていないはずの旧校舎、その部屋のあちらこちらから聞こえてくる学生たちの笑い声や楽器の音を聞き流しつつ、私は走る。

廊下を走るな、なんて書かれた張り紙は今すぐ残らず破り捨てる覚悟で。

走り抜けた先——光の溢れる場所へ出たところで、一際大きな、現実という名の歪み

が襲い来る。

「そ、んな……っ」

思わず漏れた呟きは虚しく響いて消えて行き。

目の前に広がるのは——本来ならば有り得ないはずの、何も存在していない空間。

数年前に建てられたという、入学したての私をして新品つていいなと思わせるほど真

新しい、通い慣れていたそれが。

今、目の前から忽然と姿を消していた。

「は、はは……ウソ、でしょう……？」

先程まで確かに存在した、私の中の常識は。

この時点で既に、木っ端微塵になっていた。



——数週間前、岩手。

「……っ、今のは」

不意に背筋を通り抜けていった悪寒にも似た感覚に、その教師——熊倉トシは身を振

るわせた。

これまでに、これ程まで凶悪な感覚に貫かれたことは一度だけ。

当時、プロ雀士の頂点であった小鍛治健夜が世界タイトルをかけて戦った、あの一戦を見た時以来である。

「やれやれ、彼女らも私も、大人しく隠居させてはもらえないってことかねえ……」

呟いた彼女の手には、一枚の紙が握られており。

その『教職員研修旅行申込書』の参加不参加を示す欄には、大きく丸で囲まれた『参加』という文字が記されていた。

「せめて今年のインターハイは、あの娘たちのためにも無事に迎えられたらいいんだけど——」

——同、鹿児島。

「……やっぱり、あまりいい結果は出ないわね」

畳の上に並べられた何枚もの符を片付けながら小さく溜め息を付くのは、霧島神社で巫女を務める石戸家の長女、霞である。

今現在霧島神境における最高権力者の神代家御当主より直々に齎された情報は、この手の仕事に慣れ親しんでいる霞を持ってしても思わず眉を顰めずにはいられないものだった。

占いで何かが変わるといわけではない。

だが、なんとかして対策を講じなければ自分達の大切なものが失われるかもしれない。

そうと分かっているが何もしせずにその時を待つことなど、到底できるはずもないのだ。

全てが終わった頃を見計らって開かれた襖の向こう側には、小さな頃からよく見知ったいくつもの同僚の顔が並んでいた。

「で、どうでしたかー?」

「霞ちゃんはその顔を見れば、結果は一目瞭然だけどね」

「ええ。申し訳ないけれど、これから忙しくなりそうよ。私たちはもちろんのこと、小蒔ちゃん——いえ、神境の姫様も、かしらね」

「……御勤め頑張る」

「お姉さま、私に何かお手伝いできることはありませんか?」

「わ、私もっ!」

「ありがとう、二人とも。さて、こうしてはいられないわね。みんなで小蒔ちゃんのところへ行つて、今後の対策を考えましょう」

六女仙と呼ばれる少女たちが、そろって力強く頷く。

大切なものを失わないための巫女たちによる戦いが今、人知れず静かに幕を上げた。

第03局：迷走@極めて常識的な危惧

宛の無い場所に一人佇むというシチュエーションは、実に心細いものである。

そんな当然なことを今さらながらに実感した私としては、もはやそう叫ぶ意外に自分を保つことはできそうになかった。

故に、まだ人がたくさんその辺を歩いているであろうこの時間帯に、あえて大声で叫んでやったのだ。

「つそんなオカルト有り得てたまるかあああああつ！」

——つてね。

これは父が家族で麻雀を打っている時に母に振り込んでからよく叫んでいる言葉であるが、不思議とそれを聞くたびに、私は元気になるのである。

あれどうしてなんだろうね？

と首を傾げて問いかける私に、父はよく微笑みながら教えてくれた。

この科白は自分が大切に思っている仲間の一人がよく口ずさんでいたものなんだよ、と。

そしてその人は、私にとっても決して他人ではないのだと。

言葉の意味はよく分からないけれど、たしかにそれは私に力をくれた。訳の分からない状況で一人佇むことしか出来ない、今この時でさえ。

「ふう……ちよつとスツキリしたかな」

一仕事終えた後の爽やかな笑顔を浮かべつつ、額の汗を拭う。

あちこちからこちらを見やる視線を感じるが、もはやそんなものはどうでもいい。気にしても仕方がないのだから。

携帯電話は当然だけど使えない。ネットも不可。こうなればもはや充電されない携帯型ミュージックプレイヤーである。

そんな泣きつ面に蜂な状況ではあるが、今考えなければならない問題は山積み、先送りにできそうのない優先事項は三つもあった。

一、どうやったら元いた場所に戻れるのか。あるいはこうなってしまった原因は何なのか。

二、今日寝る場所はどうか。あと食べ物も。財布の中身は残金三千円ほどである。心許ないにも程があるだろう、私の懐よ。

三、どうせなら若いお父さんに会ってみたい。アラフォーなのにあれなのだから、交代なんてきつとアイドル並に格好よかったに違いない。

優先順位は、下から順に高い↓低いである。

逆じゃないのか、という突っ込みはあえて聞き流す方向で行くのが須賀家の家訓。

無論、帰りたいと思う気持ちは強い。カラータイマーが鳴りはじめたウルトラマンをして一撃で倒すことができないカプセル怪獣程度には強い。

たかだか高校一年生、味方が誰一人居ない環境で孤軍奮闘できるほどに私の自生能力は高くはないのだから当然だろう。

一番の懸念材料であるカピちゃんとの餌やりに関しては、家にいる家族の誰かがやってくれるだろうから問題は無いとしても。

一日一回、彼女を撫でて抱きしめてモフらなければ元気が出ない私としては、この状況はまさに非常事態宣言真つ最中であるといっている。

しかし、あえてそこを抑えて父親との対面の優先順位を引き上げている理由は、

「須賀家（祖父の家）のほう）ならば、衣食住の保障に加えてカピちゃんのお母さんもいるからそっちも満たすことが出来るはずだ！」

という、まさに天才的な発想、これに尽きる。

いやまだ受け入れてもらえるかどうかは未知数な上、獲らぬ狸の何とやら、にしてもいい加減すぎるのだけど。

それでも今の私に残された唯一の希望は『彼』が私を認め、受け入れてくれることしかないのだった。

と、いうわけで。

言い訳をつらつら並べているうちに、やってきました須賀家前。

インターホンを押そう押そうとしていながら、指はそこを押せないでいる。

先程から何度同じ動作を繰り返しているのか分からないけれど、一ついえることがあるとするならば。

なにこのムダに張り詰めている緊張感。

ただ祖父母の家を訪ねてやってきた可愛い孫が一人いるだけなのに、これはいったい
どういうことか？

うんうん唸りながらも、右手は一向に進まない。

そういえば、いつもはインターホンなんて鳴らさずにさっさと扉を開けて勝手に上がりこんでいたような。

……という驚愕の事実気付いたのは、そのままの体勢で十分ほど経過した後のこと
だった。

「うう、まさかこの私がこんなチキンハートを持つイケてないガールだったなんて……」
どんよりと沈んだ空気を纏いつつも、右手に持ったハンバーガーは口元へと運ばれて
いく。

半分やけになりつつ嘔り付いたそれは、空腹を満たすには十分でも、やはり家で食べる母の手料理とは比べるべくもない程味気なかった。

突発的須賀家奇襲作戦の結果は、惨敗である。

インターホンを押すという、ある意味で箸を持つよりも簡単な作業を何故か実行することができず、すぐごと撤退した頃には既に陽はとっぷりと暮れていた。

駅前にやってきた私は、目に付いた中でも一番安いファストフードの代名詞であるマク○ナルドにて一番安いセットを注文し、今に至るといふわけだ。

これで残金は約2500円也。

今すぐに元に戻るならばともかく、いつまでこの状況が続くのか、さっぱり読めない現時点で残金これがこれというのは流石に涙が出てくるレベルで心許なかった。

この金額だと、そこそこ安く一夜を過ごす事が可能な例のお城のような建物で休憩することすら難しそうだ。

……彼氏居ない歴イコール年齢の私は一度も入ったことなどないうえに、そもそも住宅地なこの近辺にそんな建物が何処にあるのかっていう話ではあるけれども。

ともかくこのままでは公園で野宿コースである。

うら若き花の女子高生がまさかの野宿。花だけに野生なんですわね、あはは、つて笑えねーよ!?

などと一人でやっていても虚しいだけなのだが、他にやることがないのだから心の安寧を保つためには仕方がないことなのだ。たぶんだけど。

というのにも理由があつて、この時代では私が持っている携帯電話は使えないらしいのである。

この時代のそれとは規格そのものが異なる上、SIMカードに登録されているIDが不正だからネットにもアクセスできない。

携帯による暇つぶしに慣れきってしまった私たちの世代は、こうなればもう無条件に手持ち無沙汰にならざるを得ないのだった。

「はあ……ここからだとお母さんの実家までは遠いしなあ……どうしよつかない」

くしゃやくしゃに丸めた包み紙をトレーの上に放り投げ、残ったポテトを口の中に放り込む。

どうにか小腹は満たされたが、本題はこの先だ。

例のあの「開かずの間」が自由に使えるのであれば、都合よくベッドもあることだし、ある程度の問題はクリアできるはずなのだけど。

鍵はおそらく今持っているこれで問題なく開けられるとしても。

とはいえ、未使用ならともかく部室として使用中であれば住み着いてしまうわけにもいかないだろう。

背に腹は代えられぬ、とは昔の人の言葉であるが。

武士は食わねど高楊枝、とも昔の人は言っている。

どっちを選ぶかは今後の展開次第かな——なんてことを考えながら、窓の向こう側に流れていく人を無意識のままに眺めていると。

一人、不思議な人がいた。

その人は、年齢でいえばきつと私のお祖母ちゃんと同じくらい、けれどよほど機敏な動きで人並みを避けながら歩いている。

まるで、予め他人の動きが分かっているかのようなその流暢な動きに半ば見惚れていたその時。

「——？」

不意に、そのおばあさんの視線が空を舞い——こちらのそれと交錯した。

「……っ」

——ゾクリ、と。

背筋を駆け抜けていく悪寒。

久しく感じた事のなかった、凶事が起こる前触れにも似たその感覚は、子供の頃から私に芽生えていた特殊な『癖』の一つであった。

第04局：過去@考える事を止めた日

「隣、いいかしら？」

「は、はい」

蛇に睨まれた蛙の気持ちだが、今ならばよく理解できる。

先程のおばあさん——近くで見たらそれほど年齢を感じさせない雰囲気だけ——が、イチゴ味のシェイクを片手に話しかけてきたのである。

張子の虎よろしく首をかくんかくんさせながら頷く私を、その人は優しそうな瞳で見つめながら、椅子を引いて腰をかけた。

「実は私は長野に人を捜しに来ているんだけど、こうも広いと、なかなか見つけれないものでね」

「へ？ あ、はあ……それは、まあ」

「それで、滞在するのも明日の夕方までだから、半分以上はもう諦めかけていたところだったんだよ」

言いながら、にっこりと笑う。

微笑まれているというのに、背筋の震えは止まらない。むしろより強く、私の中の何

かが警鐘を鳴らしていた。

「まさか、土壇場で見つけられるとは思わなかったよ。運が良いのか、悪いのか——」
「……………」

「おや、そんなに怯えなくても平気よ？ 貴方はなにも悪くはない、強いて言うならば——
—そうだねえ、間が悪かったとでも言うのかしら」

「……………間が、悪かった……………」

「そう。本来ならば触れる事がなかったはずのものに、貴方は触れた。貴方が悪いわけじゃないの。そこにそれがあつたこと、それが問題だったのだからね」

心に直接語りかけるような、穏やかな声。

それは警戒する私の心を解すように染み込んで来て、同時に一つの真実を、私に思い出させるに至つた。

「そういったものに、なにか心当たりがあるんじゃないのかい？」

「そんなこと言われても……………あ。あの、麻雀牌……………」

そういえば、あれを握つた瞬間に世界は光に包まれて——気がつけば私は、訳の分からない状況に追い込まれていた。

あれは一体どこにいつた？

竹井アナ（高校生）がやってきた時、私はそれを咄嗟にどうしたつけ？

……そうだ、制服のポケットに入れたんだ。

慌てて右手をポケットに突っ込んで、手探りで探し当てる。それらしき形状のものに触れた時、普段ならば有り得ないほどの速さでそれを引き抜いた。

「これ、これが全ての元凶……!?!」

「おやまあ、これはまた珍しげなものを……」

ちよつと貸してみても、と言われたので素直にそれを渡す。

すると、おばあさんは懐から手のひらサイズの小箱を取り出したかと思うとそれを開け、中に入っていたモノクルを取り出して左目にかけた。

ナントカ鑑定団の鑑定士さながらのその動きは、見ていると淀みなくやたらと手馴れているようだ。

「ふむ、なるほど。たしかにこれは、この状況を生み出した最たるものといえるだろうね」

「やつぱり……」

「見てごらん。これが、この牌が持っている力の一端だよ」

言いながら、牌を強く握り締める。そして数秒、ゆっくりと手のひらを開いたその上に乗せられていた牌は――。

「……えっ? あれ? なんで?」

渡す前は確かに『白』だったはず。にも関わらず、今そこに乗せられている牌には何故か『南』と描かれていた。

「これはね——本来の用途は、雀士の本質を見抜くためのものなのよ。この場合、私は南ということね」

「えっと、手品の一種ではなく?」

「残念ながら」

苦笑しつつ、牌を私に返してくれた。その瞬間、牌はさつきまでの白い姿へと変わる。「いやぜつたい手品でしょ、これ!」

暖めたら文字が浮かび上がるとか、そういう宴会芸的なものじゃないのか。

ただ、私がいくら強く握り締めてみたところで文字は一切浮かび上がってこない。

「だったら、貴方がここに居ることそのものが性質の悪い手品のようなものかもしれないわねえ」

「う………ていうかおばあさん、私がどういう理由でここに居るのか知ってるの?」

「おばあさん……まあ否定できる年齢じゃないけどね、できれば名前で呼んでくれないかい? 私は熊倉トシ。岩手で高校の教師をしているものだよ」

「岩手で? じゃ、なんで長野に」

「研修旅行でちよつとね。本当は欠席するつもりでいたんだけど、少し前に悪い予感が

したものだから、ついでにその正体を確かめにきたつてところさ」

「悪い予感、それつてまさか……」

「半分は貴方。もう半分は、その牌だったようだね。貴方のこともあるけど、問題はそつちの牌よ。ちよつと困つたことになつたかもしれないわ」

モノクルを外して眼鏡拭きで丁寧に入れた後、小箱の中にそれを仕舞う。

ほう、と吐かれたため息がやたらと色つぽかつたのは何故だろうか。

おそらく既に私の脳が理解の域を超えていたために起こつた謎現象であろう、と。とりあえず結論付けることにして、私は一端、考えることを放棄した。

熊倉先生に出会えたことで喜ぶことがあるとすれば、まず第一に、これで野に咲く花のように生きていかなくてもよくなつたことである。

研修先の旅館は地元の駅から電車で小一時間ほど離れた温泉地にあつたが、なんと先生は私をその旅館に招待してくれたのだ！

カピちゃんママさんモフモフ計画は発動することもなく頓挫したものの、それを補つて余りある待遇だつた。普通に泣いた。

温泉で疲れた心と身体を癒し、美味しい料理を御馳走になつて、ようやく人心地ついた頃――。

私と熊倉先生は景色の見える窓際の小さなテーブルで向かい合って、静かにお茶を飲んでいた。

一見すると、孫とお祖母ちゃんが仲良く一緒に旅行しているように見えるかもしれないが、二人はほんの二時間ほど前に出遭ったばかりである。

「そういえば、さつきお風呂に入っているときに思ったんだけど、貴方のお名前を聞いていなかったわね」

「え？ 今になってやっとそこに疑問を抱くの？ トシさんちよつと変わってるって言われたい？」

「いえ？ 教え子達からそんな風に言われたことはないねえ」

「あ、これウソついてる人の顔だ」

あえて視線を合わせようとしないう態度がもう自白しているも同じであることに、彼女は気付いているのだろうか？

なんて問いかけるまでも無く、気付いていてやっているに決まっていた。

口元にうつすらと浮かんでいる笑みが、その証拠だろう。

「ま、いつか。こうして助けてもらってるんだし、それくらいはね。というか今まで普通に名乗るの忘れててごめんなさい」

なんせあまりにも予想外な事が立て続けに起こったものだから、冷静にしているつも

りでもどこかやつぱりテンパっていたのだろう。

ここまで来る電車の中ではほとんどの時間を眠っていたし、着いてからは食事やら入浴やらでんやわんやだったこともある。

とはいえ、名乗りを上げずにここまでお世話になってしまったのは、母親に知られてしまえば恐ろしい目に合わされることが確定している程の大失態だ。

なので頭を下げて謝罪してから、姿勢を正す。

「私は須賀調すがしらべといます。困っていたところを助けていただき、感謝しています。本当にありがとうございます」

「須賀さんね。それとも調ちゃんって呼んだ方が良い？」

「他の人ならいざ知らず、トシさん相手に文句なんて言いませんよ？ お好きによんでくださって構いません」

「あらあら、それじゃ調って呼び捨てにさせてもらおうかねえ」

「あはは、それってなんだかお母さんみたい」

「貴方みたいな可愛い子のお母さんっていうのは、いろんな意味で大変そうね」

「可愛い子、と大変そう、というのが微妙に噛み合わないような気がするの私の気のせいですかね？」

ジト目でそれを問いかける私に、熊倉先生は「胸に手を充てて考えてみたらどう？」と

いう切れ味鋭いカウンターを決めてきた。

最初に感じた悪寒がまるでウソであるかのように、この人との相性は悪くないように思える。

年齢は天と地程の差がある（と実際に口にしたら小突かれた）わりに、同年代の友人と話をしているような気さくさがあるからだろうか。

ともあれ、寝るまでには少し時間があるのだ。

温泉でリフレッシュしたことで、ある程度気持ちの部分も落ち着いた。

お互いに気になることは山ほどあるのだから、この機を逃さずに色々と話しておくべきだろう。

「改めてもつかい聞くけど。トシさんは、私がどういいう立場の人間かとかそういうこと、全部判ってるの?」

「いいえ? 分かってしていることと言えば、そうね……調が持っているその牌は、下手をすると世界規模であまり良い結果を齎さないものになるかもしれない、ということくらいかしら」

「……この手品に使う小道具みたいなの?」

「言ったでしょう、それはその牌が持つ力の一端だと。本当の力をもっと複雑で恐ろしいものよ」

「恐ろしいって言われても、ピンとこないなあ……たかがマイナー遊戯で使う道具ってだけなのに、世界がどうか言われても」

「マイナー遊戯？　麻雀が？」

「え？　違う？　少なくとも私の友達は何も麻雀なんてやらないよ？」

「そうなの？　おかしいねえ……長野はわりと麻雀が盛んな県だったはずだけど。去年のインターハイでも破格の強さを見せていたしねえ」

「はあ？　インターハイ？　麻雀で？　なにそれ？」

「おや、毎年全国大会はどの地域でもテレビでやってるはずだけど、見ていないのかい？」

「いやそんなまさかあ。インターハイつつつたって、全国でテレビ放送やるなんて有り得ないって。甲子園じゃないんだから」

「……甲子園？　いまプロ野球の話は関係ないでしょう？」

「……あれ？」

ここまですると、お互いに会話がズレていることにはさすがに気付いていた。

しかし、二人ともがそれを理解しながら半信半疑だったこともあり、そのまま会話を続行した結果——次のようなことになったわけ。

「え〜っ!?　麻雀が老若男女問わずに大人気な競技で、全国には地域密着型のプロチー

ムが多数あつて、更にオリンピックでも競技になつてゐる！」

「驚いたねえ……麻雀がそんな風に貴方に思われているなんて、一端の雀士としては残念でもあり、ちよつと腹立たしくもあるよ」

「いやいや、たしかに麻雀プロつて職業はあるつて聞いたことあるけどさ、地味いなもんだよ？ それなのにオリンピックで……スポーツですらないじゃん」

「地味なもんかね。いいかい？ 一流のプロ契約をした選手は億単位のお金を貰えることだつてあるんだよ？ プロスポーツの花形といつても過言じゃないさ」

「いやいやいやいや、野球とかサッカーでも苦戦してるのに麻雀でそんな上手く行くわけないつてば。トシさん冗談下手すぎだな」

「現実をきちんと見れないと、碌な大人にはなれやしないよ。いいかい調、今からでも遅くはないからきちんと現実を見て——」

結果的に言い争いっぽくなつてしまつたものの、二人の意見をすり合わせた結果、判明したこと。

どうやらこの世界、世界観などの相違点を踏まえて考えるに、単純に過去——私の認識でいう二十年近く前——というわけではなさそうである。

なんといつても麻雀というマイナー遊戯がまるで国民的に知名度の高い野球やサツ

カーと同等かそれ以上に持て囃され、流行しているこの世界だ。

正直な感想を申し上げるとするならば、眉唾物でしかないわけだけど。

言われてみれば、で思い出すのは例の「開かずの間」で見た光景である。

たしかにあの部屋の中央にドーンとこれ見よがしに置かれていたのは、麻雀を打つ時に使われる全自動卓らしき物体だった。

そして、ホワイトボードに書かれていた予定表。あそこには確かに、全国大会やら長野県大会やら、そんな不釣り合いな文字が躍っていたように記憶している。

よくよく考えれば、麻雀牌によつて導かれてやつてきたこの世界が麻雀に満ちていたとしても、さして不思議はないのかもしれない。

——なんて普通に思ってしまうあたり、状況に毒されて『常識的な考え方』というものが麻痺してしまっている証拠であり、この時点で既にかなりヤバい気がしなくも無いけれど。

更に加えて驚くべきは、麻雀という存在そのものについてである。

それは既に私が知っているものとはかけ離れたまったくの別モノといつても過言ではなく、その話の至る所に俄かには信じがたい要素が幾つも鏤められていた。

「この世界の麻雀には、色々な打ち手がある。例えば相手に有効牌をツモらせない打ち手や、その逆、自分に有利な牌を必ず引いてくる打ち手とかね」

「それって単にイカサマやってるだけとかじゃなくて？」

「もちろん、そっち方面に特化した打ち手も多くはないけど存在するさ。大抵は裏世界に潜って勝手にやってるだけだから私らは放っておくだけけど。」

私が今言ったのは、それとは違う。この世界では『能力（オカルト）』と呼ばれる類の、麻雀ルールに則った正当性のあるものよ」

「オカルトって、また妙な単語が出てきたなあ……んで、トシさんもなんかそんなぶつとんだ打ち手の一人だったりするの？」

「私かい？ 私はそうだね——強いて言うなら、そういった連中の『能力』を封印する能力を持つ、といったところかねえ」

「うおう!? 想像してたところの斜め上をひた走る程の強キャラだった!？」

「ははは、言う程すごい成績は残せていないのよ。私はむしろ、そういった能力を持つている人間を発掘するのを得意とする側だね」

今教えている学校の生徒たちも、強弱はあれども全員がそういった特殊能力を持った打ち手なんだ、と笑う。

この世界には特殊能力者がそんなぼこじやが生まれてくるものなんだろうか？

そう考えると、至って普通の真人間である私がそんな異能力麻雀蔓延るこの世界にやってきてしまったのは何故か、甚だ疑問である。

「貴方のいた未来?というよりは別の世界かしらね。そこでは麻雀そのものがマイナーで、あまり遊ばれていないということなのよね?」

「んー、少なくとも老若男女問わずに遊ばれてるってことはないかなあ。どっちかっていうと悪い大人の遊び的な扱いを受けてるところはあるかも?」

「そう——なるほど……」

何か思い当たる節でもあるのか。

トシさんは少し考え込むようにして目を閉じてから、やがて何かを決意したかのように力強く頷いた。

「ちようど良い機会だから、麻雀について間違った知識を持っている貴方に私が直々に色々と教えておいてあげようかね」

「え、ちよつと待って。これからってこと? いやいやトシさん、もう私ちよつと眠いんだだけ」

「まだ寝る時間には早いわねえ。ほら調、こっちに来なさい」

「ちよ、力強つ!?! トシさんって本気で何者なの!?!」

もはや混沌としか言い表せない世界で、私は思う。

お年寄りというのは、決して熱く語らせてはいけないのだということ。

数時間あまり続いた特別レッスンに痺れた足を引きずりながら布団の中へ潜り込ん

だ頃には、既に日付が変わっていたのだから。

結局のところ、あの麻雀牌がどう危険なのかすら教えてもらえていないわけで。

元の世界だか未来だかに戻る手がかりになりそうなことも、さっぱり分からないままである。

とはいえ、それ以外の部分で貴重な情報が得られたことには感謝しよう。

あとこの布団の温もりにもね。

第05局：選択@伸るか反るかの一択

「あれー？　かなちゃん先生、なにやってるの？」

「うわ！　つとと、なんだ須賀さんとこの調ちゃんか。いや別になんでもないし」

「ふうん。あー、そういえばみつぼ先生が呼んでたよー？　またなにかやったの？」

「またつてなんだ、またつて。人聞き悪いな」

「だって去年のはろういんの時とかー、おひなさまのかざりつけの時とかー」

「ああもうほら、ここは立て込んで危ないからあっち行って友達と遊んでくるし！
でも怪我だけは気をつけるんだぞ」

「はーい。おまかせあれー」

「やれやれ……聞き分けがいいのは助かるけど、アグレッシブに飛び回るありや完全に父親の血だな」

目を覚ました直後、見慣れない天井を見つけて少しだけ呆然とし。

改めて周囲を見回してみても、そういえばここは自分の部屋じゃなかったんだなと思いつく。

少しだけ、目を覚ましたらいつもの光景に戻っているんじゃないかと期待をしていた自分がいたにも関わらず、現実はまだただ無常に無情であったということか。

それにしても……なんだか懐かしい頃の夢を見たような気がする。

まだ私がランドセルを背負うにも満たないくらいに幼かった頃の話。

父親が仕事の都合で遠く広島の地へと転勤することになったため、一時期だけ母親と共に長野の祖父母の家に預けられていたことがあったんだけど。

はつきりとは覚えていないものの、どうもその頃の夢だったような……。

そういえばあの時も色々とお父さんがお酒を飲んだ後に洩らした過去話の中で言ってたっけ。

母親側と父親側、どっちの祖父母が預かるか——というような話だったらしいけど、どうして父の実家に預けられたのかという詳しい経緯は聞いていない。

ただ、私のカピちゃんもふもふ癖が身に染み付いてしまったのがどうやらその頃だったと推測されるあたり、もしかすると私がなにか我侷を言ったのかもしれない。

さて、奇しくも今回も似たような問題がどーんと立ちはだかつているわけだけども、いまのところ、私の目の前には三つの選択肢が存在している。

①このままトシさんと一緒に岩手へと向かい、お世話になる。仲間と連絡をとって、元の世界に戻る方法を一緒に探してくれるらしい。

② 予定通り須賀家へと向かう。トシさんに付いて来てもらって説明してもらおうことになるけど、信じてもらえるかどうかは未知数。ダメな場合は①に。

③ 母親の実家のほうにお世話になる。後の展開は須賀家の場合と同じ。

……こやうやって一覧にすると実質一択に見えるのは気のせいだろうか。

別の世界からやってきたあなたの子供です、元の世界に戻れるまで面倒かけるけどよろしくね！

っていう荒唐無稽な現実をきちんと理解してもらわないとダメなんだから、ハードルは高い。

棒高跳びか!? って思わずコテコテの漫才風ツツコミを披露してしまいそうなほど高い。

ちなみに私は走り高跳びだと一メートル二十センチくらいまでしか飛べない。越えさせたいならばもつと低いハードルを用意してもらいたいものだ。

「おはよう、調。難しい顔をして、どうかしたの?」

「あつ、おはようトシさん。ちよつと、これからどうするか考えてただけ」

「お父さんのところか、お母さんのところかってことかい?」

「それもそうんだけど……私のこと、信じてもらえるかがやっぱり、ね」

パタリと生徒手帳を閉じて、背もたれに深く寄りかかる。

DNA鑑定にでもかければ親子であることは証明できそうなものだけど、そんな費用をどこから捻出してくるつもりだ、という話である。

……そもそもあれって鑑定料はいくらくらいかかるものなんだろうか？

こういう時にさくつと調べられないのは痛いな。せめて携帯くらいは普通に使えるようにしておきたいところだけだ。

ああもう。何をやるにしても、まずは先立つもの。即ち、お金、お金、お金……。

この世の中はなんて世知辛いんだろう。齢十五にして、既に世の真理に到達した感のある今日この頃だ。

「案ずるより生むが易し。遠慮も心配もしなくとも、どっちも無理そうなら私が面倒を見てあげるよ」

「……うん。ありがとう」

と口ではお礼を言っているわりに、心の中は弱気だった。

というのも、そもそもこの世界にいる限り、私にとつての味方はたった一人しかいないという現実がそこにあつて。

状況をきちんと把握していて、なおかつ協力を約束してくれている人。

迷惑をかけていることは理解しているし、これ以上お世話になるのも心苦しくはある。けど、結局私はこの世界にいる限りはトシさんの優しさに縋り付くしかないのもま

た事実だった。

あの時インターホンを押せなかったのは、迷いがあつたからなのか。

一晩経つて、寝て起きた程度じや状況が何も変わらないことをも理解して、ある意味自分の置かれてる立場に諦めがついた後だから分かることではあるけれど。

私は父も母も父方母方関係なく祖父母のことも大好きだから、その誰か一人にだって否定されたくはなくて、拒絶されることに対して恐怖心を抱いていた。それはたぶん、間違いないことだろう。

それでも——どれかの選択肢を必ず選ばなければいけないのだとしたら、私はきつと。

「……決めたよ、トシさん」

「そうかい」

「うん。初志貫徹、やっぱり私はどんな時でも私らしくしてないかね」

旅の恥は掻き捨ての精神で、常識も道理も物理法則もなんもかんも窓から投げ捨ててしまえばいい。

凶々しくも快適に生き残るための道を私は選ばうと思う。

幼い頃から何一つ変わってはいないのだろう、私の選択基準はいつでも大好きなものの順と相場が決まっているのだから。

須賀家の祖父母は、実に対照的だった。

編み物や人形作りなんかのインドア系の趣味を好む祖母と、釣りや日曜大工などアウトドア系の趣味を好む祖父。

純和風の食べ物が大好きな祖父と、どちらかというと言食のほうが得意な祖母。

生まれが東京なので読売巨人軍が大好きな祖母と、長野生まれで縁も所縁もないはずなのに何故だか阪神タイガースが大好きな祖父。

普通そんな感じだとカップルとして成立しそうにないと思うんだけど、それなのに二人はとても仲がいいから不思議だった。

ちなみにお見合い結婚だったらしい。

他人事ながら、もし恋愛結婚だったとしたら結婚する前に音楽性の違いとかで別れていてもおかしくなかったと思う。

閑話休題。

同じ研修で泊まっている他の教職員さんたちより早めに宿を発った私たちは、再び電車を乗り継いで清澄高校の最寄駅まで戻ってきた。

目指すは前回挫折した須賀家への突撃である。

日曜日とはいえ、今の時間はお昼ちよつと過ぎ。確実に家に残っていそうなのは、お

祖母ちゃん——今この呼び方をしたら間違いなく拳骨を喰らうことになるだろうけど——くらいのものだろう。

祖父はいっぱいある趣味の中でも特に釣りが大好きで、幼稚園の頃にはよく近所の釣り堀に連れて行ってもらったものだ。今日もいい天気だし、遊びに出かけていても不思議じゃない。

お父さんは高校時代、サッカー部に所属していたと聞いた。まあ、今のお仕事から考えても当たり前っちゃ当たり前だけど。

私は帰宅部だったので詳しくはないんだけど、運動部が日曜日のお昼に部活動をやっていない、ということはないはず。

そうであれば、来る時間を盛大に間違ったのではないだろうか。

須賀家の前に着いたのは、ちょうどそんなことを考えていた時のことだった。

いけない。余計な事を考えてばかりで肝心な心の準備を一切していなかった……。

「調、準備はいいかい？」

「う、うん……あ、ちよつと待って」

すーは、すーは。

他人の玄関の前で深呼吸を繰り返す女。傍から見たら怪しき大爆発にも程があると
は思うけど、今はそれくらいの犠牲で心を落ち着けられるなら安いものだ。

——いぎー！

私がこくりと頷くと、トシさんは何の躊躇もせず戸惑うこともなく目の前のインターホンのボタンを押した。

しばらくして。

『——はい、須賀です』

スピーカーの向こう側から聞こえてきた、その声。

あまりにも懐かしく感じられるそれが間違いなく祖母の声だと認識した瞬間、不覚にも泣きそうになった。

第06局：原点@ここから始まる物語

「ごめんなさいね、京太郎は今ちよつとお使いで出かけてるのよ。お茶でも飲んで待っててちようだいね」

「あ、ありがと——うございます」

いつもの通りフランクに話しかけようとして、慌てて取り繕う私。

やたらと上機嫌なおばあ……ではなくて、須賀のお母さん（面倒だからお祖母ちゃんでもいいか）に客間へと連れて来られ、お茶を振舞われた。

意外とそそっかしい上に勘繰りすぎるこの人のことだ、何か盛大に勘違いしているのかもしれない。

状況的にちよつと考えれば分かると思うんだけど……。

例えば。あくまで例えばだよ？ 仮に私がお父さんの彼女だったとして、祖母同伴で彼氏の家に遊びに来るなんて豪胆な真似をするわけがないだろうに。

そんな当たり前のことに気づかない程浮かれてしまっているのだろうか？

それとも……まさかとは思うけどお祖母ちゃん、元の世界に戻って万が一私に彼氏が出来た時、デートに付いてくるなんて言わないよね？

そんなことしようものなら初回のデートが始まる前に余裕でフラれるわ。

ニコニコと笑っているその表情を見るにつけ、将来への不安はどんどん蓄積されていくのだった。

方や一緒に須賀家を訪問中のトシさんはといえば、緑茶を片手に寛ぎまくっている。こういうのも場慣れしていると言っているのだろうか？ あるいは神経がバオバブの木の幹くらいぶつ太いとか。

頼もしいといえはその通りだけどき、その余裕は一体どこから湧いて出てくるのやら。

これが年の功か、と思わず口走って額をぺしつとやられたのもご愛嬌ではあるけれど。

『ただいまー』

という、遠巻きに聞こえてきた記憶に強く残るその声に、私の意識は完全に持つていかれてしまった。

お祖母ちゃんに連れられて客間へとやってきたお父さん（※15歳）。

第一印象をもしここで語って聞かせるとするならば、きつと一晩かけても語りつくせないものがあると思うんだよね。

だからこそ、あえてここは単刀直入に言おうと思う。

——若っ！ お父さん若っ！ ヤングメンすぎて私の常識がヤバイ！

同年代になってきているんだから考えてみれば当然ではあるものの、実際に見てみたときの衝撃たるや半端ないものがあつた。昔見せてもらった高校時代の写真と比べても遜色のない、実に若々しくて格好良いイケメン青年（※当社比）である。

身内びいき？ そりや当然ありますが、何か？

でもそれを差し引いて見てもかっこいいと思うんだ。背も高いしね。

くそー、やるなお母さん。独特のネガティブオーラで人を威圧するという残念な特技を持つあの人が、まさかこんな活きの良い（見た目ちよつと軽いつぼいけど）好青年を捕まえるなんて。お母さんの友達曰く『須賀家の七不思議』の一つに数えられる理由がよく分かるというものだ。

でも、あれだね。部活動に出ているはずの時間だけど、当たり前のように私服で戻ってきたということは、本日は部活お休みだったんだらうか？

私の知っている清澄高校サッカー部は、けつこう練習が厳しくて平日の朝練は当然として、土曜日曜祝日も一切関係なく朝から晩まで練習尽くし。完全休養日なんてものは何処にも存在しない、というような泣き言を入部した幼馴染から聞かされたと思っただけ……。

世界線が違ふところといった細かい部分も違いが出てくるもののかな。

「あの一、さすがにそんなにマジマジと見られるとちよつと……」

「あ、ごめんなさいっ」

いけないいけない、ついマジ観察モードに入ってしまった。

一方的に知っているだけで、実質相手とは初対面なのだから印象が悪くなるような行為は控えなければ。

ちらりと隣に座っているトシさんに助けを求める視線を送る。仕方がないと言わんばかりに湯のみを置いて、場を仕切りなおすためにと小さく一つ咳払いをしつつ。

「君が須賀京太郎くんかい？」

「はあ、まあ……そうですね、あんたたちは何処の何方で？」

「私は熊倉トシ。岩手で教員なんかをやっているものだけだね。ああ、そしてこっちの子が——あなたの娘さんの、須賀調ちゃん」

「——はっ？」

よりもよつて、直球をど真ん中へと放り込むような一言をさらりと放った。

思惑を外れて良かったのか悪かったのか、お祖母ちゃんもお父さんも、あろうことかお祖父ちゃんまでも。須賀家ご一同様が全員揃われている日曜日のお昼過ぎ。

ちよこんとソファに腰を掛けた格好のまま、微動だに出来ない状況がそこにあって。

「……」

「……」

「……」

私は目の前に置かれている湯飲みに口をつけることさえ許されず、ただ置き物の熊のように膝を揃えて背筋を伸ばした状態のまま固まっていた。

穴が開く程見られる、というのをまさか自分が体験することになるうとは。つい先日まで——具体的には昨日の夕方くらいまでは考えたこともなかったはずなのに。この三人からこんなにも一身に視線を向けられるなんてこと、お母さんのお腹の中から産まれ落ちた時以来なんじやなかるうか。

ただ、覚えてなんているわけでもないけどあの時の熱の籠ったそれとは違って、今向けられているのは胡散臭い詐欺師でも見るかのような半開きの目であった。

けど待つてほしい、もし私が詐欺グループの一員だったとしても、こんなアホみたいなウソは付かない自信がある。できればウソであつてほしいと願っているのは他ならぬ私自身なのだから。

「……よく似た世界の未来から来た、ねえ。それマジで言つてんの?」

「えへっ。残念ながら大マジなんだなあ、これが」

「見るからにウソくせえ!」

場の雰囲気のをませようと、できるだけ可愛らしく陽気に肯定してみたら逆に疑惑を深めてしまったらしい。何故だ?

「だいたいな、そんな訳の分からない話を信じるような奴がこの世界のどこに——」

「あら京太郎。私は信じるわよ、今の話」

「……えっ?」

トシさんからのある程度分かり易くなるようにと噛み砕かれた説明を受け、皆が皆、眉を顰めて怪訝そうな表情を見せる中、こともなげにそう言ったのはたった一人この状況下で笑顔を崩そうともしなかったお祖母ちゃんその人だった。

「ちよ、母さん——!?!」

「一目見たときから懐かしさを感じてはいたんだけど、そういうことだったのねえ。だってこの子ってばほら、口元なんて京太郎にそっくりじゃない? ねえ?」

「いやぜんぜん分かんねーし!」

「そう? 自分のことだから分らないのかしらね……お父さんは分かるでしょ?」

「む、いや、まあ……似ているといえ、似ているが……」

じつと二人に交互に見つめられて、思わず顔を見合わせてしまう私とお父さん。

髪の色はともかくとして、外見で父親に似ていると誰かに言われたことのない私とし

ては、その科白には少し思うところがありはするけども。

思わぬところから援護射撃が飛んできたなあ、と冷静に考える自分がいることに少し驚いた。

「いやねえ、二人ともそんなに深刻に考えなくても良いじゃない。今はただ、家族が一人増えたと思えばそれで」

「いやいやいやいや、それって充分深刻だろ!? 親父もなんとか言ってやってくれ!」

「……母さんがこう言い出したら俺には止められん。諦めろ」

「まさかのそっち側かよ!」

相変わらずお祖母ちゃんには弱いね、お祖父ちゃん。

他人事とっていいのかは分からないけど、孤立無援状態になったお父さんが少し可哀想になるくらいとんとん拍子に話が進んでいく。

トシさんの口添えのおかげか、特に障害が発生することもなく（一部抵抗勢力を除く）元の世界に戻る手掛かりが見つかるまでは一緒に暮らしていこうということになった。

その間の部屋は、二階に空き部屋が一つあるからそこを使っていいらしい。その部屋というのが向こうでも幼稚園時代にお母さんと一緒に使っていた部屋のことだとピンときて、少し嬉しくなってしまう自分がちよつと可愛いと思う。

もう勝手にしてくれ、と天を仰いだままのお父さんを尻目に、お祖母ちゃんの勢いは

止まらない。

「それで。調ちゃん、学校はどうするつもりなの？」

「えーと、できれば早く元の世界に戻りたいから、トシさんから連絡があった時に自由に動けるようにしておきたいんだけど……」

「でも向こうでは清澄に通っていたんでしよう？ 熊倉さんも、学校はきちんと通って

おいた方がいいとお思いではありません？」

「たしかにそうだねえ。調の話を聞く限りだと、原因の一つに清澄高校が関係しているのかもしれないし……通えるようなら通ったほうがいいかもしれないね」

「えー!？」

「いやいやそんなまさか……。二人してこんな類似世界にまで来て暢気に学校へ行けと申されるか!？」

「手続きはお任せしても？」

「面倒を押し付けるようなものだし、それくらいは構わないよ。幸い色々と伝もあることだしね」

「えー……」

押し付けられた面倒の張本人としては、受け入れ側の方針に従わざるを得ないんだけどさ。

私も大概そうかもしれないけど、お祖母ちゃんのこの非現実への順応っぷりはいったいどうしたことだろうね？

自分で言つててもおかしい話だと思うけど、むしろ疑いの目を向けてくるお父さんのほうがまだ心情的には納得が出来るというものだ。

「というわけで、手続きが済み次第学校へは行くこと。それが受け入れる条件つてことで、調ちゃんもいいわね？」

「そんなあ……」

「——返事は？」

「うー……はあい」

「ん。よろしい」

いい子いい子と頭を撫でられる。

世界がたとえ違つても、歳が祖母と孫というよりは母親と娘くらいに縮まつてしまつていても、お祖母ちゃんの手のひらは優しく私を包み込んでくれるのだった。

——こうして私は、よく見知つた、それでいて違う世界の住人としてしばらく過ごすことになる。

その幕開けはあつけないものでも、終幕へと続く道のりは決して平坦というわけでも

なく。

私の手のひらの中できらりと輝きを放ったその麻雀牌が指し示すように、目の前には雷鳴轟く暗雲が立ち込めているように思えるのだった。

▽とある親子の会話の一幕

「まいつか。せっかくだしサッカー部のマネージャーでもやってお父さんの若かりし頃の雄姿を目に焼き付けておこうかな。帰ってからお母さんにドヤ顔で自慢できそうだし——」

「いや、どうでもいいけど俺サッカー部には入ってないが」

——うん？ 今なんて？

サッカー部には入ってない、と言いませんでしたか？

「え？ なんて？」

「なんでって言われてもなあ……中学ん時はハンドボール部だったし、今のところサッカーには縁も所縁もないぞ、俺」

「——はっ!?!」

ちよつと待って。それだと後々私的にはちよつとどころかかなり困ることになるんじゃないの？

ヤバイ、こんがらがってきた。

たしかお母さんとお父さんはサッカー関係のお仕事で出遭ったって聞いたし、そうなのとお母さんと出会う理由がそもそも無くなって結果的に私は……って、ここが違う世界ならそれでも別にいいのかな？ あれ？

「じゃあずっと帰宅部なの？　せつかくの青春ドブに捨てちゃうの？　バカなの？」

「うっせーよ。でもまあ、青春云々はともかく今のところは麻雀部に入ってみようかと考えてはいるけどな」

「なんですと!?!」

第07局：従姉@お子様はお姉さま？

お父さん。お父様。親父。パパ。ダディ。

それぞれの家庭や環境によつて呼び方は多種多様で、それぞれに違った味があるけれど。

こと須賀家においては小さい頃は『とつと』と呼び、小学生高学年と呼ばれる頃には『お父さん』呼びに変化して、自然と定着していったとおぼろげながら自覚している。

故に私の中で父親はお父さんと呼ぶことになっていて、それは不文律のようなものでもある。

そんな私があえて父親の呼称を改めようと思った背景には、当然避けがたい一つの事情があつてこそ。というのも、

「そのお父さんって呼ぶのだけは止めてくれ」

と必死に懇願されてしまったからに他ならない。

まあ、同級生の子にお父さん呼ばわりされるのはさすがにキツイだろうから、ここは折れてあげることにしたわけさ。

それにしばらく須賀家にお世話になる以上、仮初の身分と言うのを作らなければなら

ないということ、公式発表的に私はお父さんの従姉妹という扱いを受けることになった。

須賀姓はそのままなので、父方の親戚ということになるかな。

——で、それなら何と呼ぶべきかという難題に頭を抱えていたところ、お祖母ちゃんがやおやつのお芋羊羹を持ってやってきて、いいことを教えてくれた。

甘いものを食べながら考え事するのは効率がいいんだってね。知ってた？

つて、教えてくれたいい事っていうのはそんな雑学じゃなくて、いわゆるお父さんのお友達事情というやつだ。どう呼ばいいか迷っていると素直に相談してみたところ、周辺の子達はこんなふうに呼んでいるという例を逐一挙げて教えてくれたのである。

「京ちゃん？」

「そうなのよ。京太郎の幼なじみで、同じ学校に通ってる子がそう呼んでるの。宮永咲ちゃんっていうんだけど——知ってる？」

「宮永……うーん、ちよつと聞いたことがないかも？ 宮永、はて……」

そういうばお父さん宛の年賀状にそんな名前の宛先があつたような気がしないでもないけど。

ん？ ちよつと待てよ、たしか今年から清澄高校に赴任してきた例の美人先生の名前、あれもたしか宮永——じゃなかつたっけ。

でもあの人の名前って宮永咲だった？ いや、なんかちよつと違った気がするな。ええと、たしか全校集会の自己紹介で名乗っていた名前は……そう。咲じゃなくて照。宮永照って言うてたような覚えがある。

「ねえおばーちゃん。その人って宮永照じゃなくて、咲なの？」

可愛らしく問いかけてみたら、なぜかこめかみに青筋を立てたお祖母ちゃんによつて芋羊羹が没収されてしまった。何故？

「……そのおばーちゃんも禁止。いい？」

「あ……ゴメンなさい。えーと、でもじゃあどう呼べばいいの？」

「熊倉さんのことをトシさんって呼んでたわよね。なら私のことはさよちゃんって呼んでくれたらいいわ」

「さよちゃん？」

お祖母ちゃんの名前が須賀紗依さよりだからさよちゃんってことだろうか。安直な——なんて言うてしまえば人質ようかんが戻つてきそうにないので、素直にうなずく。なんとというオトナな対応だろう。さすが私。

返してもらつた芋羊羹を一切れすぐさま口の中に確保しつつ、しれつと宮永照先生についての情報を聞くことにする。

「——で、照ちゃんのことだったかしら？ たしか咲ちゃんのお姉さんがそんな名前

だったようなことを咲ちゃんのお父さんから聞いたことがあるような気がするわねえ」
「お姉ちゃん？ ああ、なるほどなるほど。お父さ……もう面倒だしとりあえず京ちゃんでもいいかな、と照ちゃんって人は仲良いの？」

「直接面識は無いんじゃない？ 私もお姉さんがいるって話をいつだったかに宮永さんから伺ったことがあるだけで、直接会ったことは無いのよ」

「ふうん……幼なじみなのに変なの」

普通におうちに遊びに行ったりするような幼なじみ同士なら、お互いの兄弟とか姉妹とも面識があるはずだろうにね。

ちなみに私の幼なじみは男の子だけど、そのお姉ちゃんと私は普通にメル友である。

無類の猫好きな上、萩原唯という名前なので密かに心の中でだけ呼んでいた『ゆいちゃん』という呼び名を、ある時公衆の面前でつい口走ってしまい、彼女のクラス内で流行らせてしまった時には一ヶ月くらいマトモに口をきいてくれなかつたけど。たぶん仲良しのはず。

「それにしても、調ちゃんが咲ちゃんのことを知らないとなると……あの子のお嫁さんは咲ちゃんじゃないってことかしらね。これはちよつと意外だわ……」

「——ん？ おば……さよちゃん今何か言った？」

「いいえ、なんでもないわ。それより調ちゃん、明日着る物を買に行きましようか。他

にも生活用品は色々揃えておかないと不便でしょ？」

「あ、そっか。でもいいの？」

「ふふ。孫は際限なく可愛がるものだって私のお母さんも言ってたし、いいんじゃないかしらね。京太郎は今のところお金使うような趣味を持つてゐるわけでもないし、それに男の子はだいたい着の身着のままでしょ？ 張り合いがなくなつて……」

「あ……」

「だから調ちゃんに来てくれて、私的には大歓迎なのよ。息子もいいけど、娘も欲しかったし——」

言いかけたとき、不意にリビングと廊下とを繋いでいる扉が開けられた。

「母さん、親父が昨日持ってたアレどこに仕舞ったか——げっ」

「げってなんだ、げって。こんな可愛い自慢の愛娘を捕まえて、よくもまあそんな『拙いやつがいた』みたいな迂闊な表情が出来るものだ。」

ちよつとイラつときいたので、母親直伝のできる限り愛くるしくも見目麗しき淑女の如き微笑を携えて、私はにこりと笑つてみせた。

「さすがにそれはないんじゃないかなあ、京ちゃん」

「京ちゃん……だど？」

「フフン、お父さん呼びがダメってんならここらあたりで妥協してもらわないと、ね？」

京ちゃん？」

「……おい母さん、そいつになんか余計なこと吹き込んだろ」

「余計だなんて失礼な。ああ、それとね京太郎。あんたいい加減良い人止まりじゃダメよ？ きちんと攻めるときには攻める男らしきを見せないと、せつかくの家事が得意な女の子を取り逃がして行き遅れ掴まされることになつてもお母さんは知りませんからね」

「いきなり何の話だよ!？」

「あなたの将来の話です」

さすがはお祖母ちゃん。鋭いところを突いてくるね。

まったく無関係な場所でいまだ顔を会わせてすらいないはずなのに、発言の端々から既にうつつすらと嫁姑関係が透けて見えるのは何故だろう？ まあ向こうの世界の二人はけっこう仲良かったりするんだけど。

お祖母ちゃんは言いたいことを言い終わったのか、お祖父ちゃんの用事を済ませるために「明日は予定を明けておくように」とだけ言い残して去ってしまった。

残された私とお父さんは、なんともいえない空気の中で顔を見合わせる。

「……なあ」

「うん？　なあに？」

「お前さ、マジで俺の娘なの？」

「正確には、別の世界の須賀京太郎の娘ってことになるみたいだけどね。なんならDNA検査とかしてみちゃう？」

「いや、止めとくわ。そんなことしてまで確証を得たいとは思ってないし……あのウキウキ具合を見るにどうせムダだしな」

「そっか。芋羊羹食べる？ 美味しいよ」

「せっかくだしもらつとくわ……はあ」

ソファに深く腰を下ろし、溜息をつくお父さん。爪楊枝が刺さっている芋羊羹を一切れ摘み、ほおばった。

「俺の娘ってことは、当たり前のように母親がいるんだよな？ どんな人なんだ……つて、これ聞いても良いのか？」

「うーん、どうだろ。別の世界だしいいんじゃないかなって思うけど、もしその人に会った時に変に意識しちやったりするかもしれないし、大変なのは京ちゃんだよな」

「……その京ちゃんってのどうにかならないか？」

「えー、我俣だなあもう。それじゃ京くんとかでいい？」

「ああ、頼むわ。なんか咲じゃないヤツから呼ばれると違和感しか残らねえ」

へえ——ということはその咲ちゃん、宮永咲とはわりと気安い付き合いをしているっ

てことなのかな。

これはもしかしなくてもお母さんにとって恋のライバルと言うヤツだろうか？
うーん、でも一度実物を拝謁してみないことには判断は保留かな。

「で、お母さんのこと聞きたいの？」

「聞きたいような、聞きたくないような……」

腕組みをして天を仰ごうとしたお父さんの視線が、一瞬、私の胸元へと注がれる。

……ああ、なるほど。おっぱい星人として名を馳せたことのある（※お母さん談）お父さんとしては、やっぱりそこが気になっちゃうなあ。

私は同年代の女性における平均的なサイズと比べたら、やや小さい。二つ上のゆい
にやんと比べて少しだけ勝っていることが唯一の救いだけど、だからといってそんな事
実は世の男性にとってはどんぐりが精一杯見栄を張って背比べをしているようなもの
だという。実に失礼な話だ。

小学生のくせにやたらと重そうなものをぶら下げている子もいるし、そういう子はた
いてい母親もなんかすごい人が多い。その現実を思い知らされるたびにいつも思った
ことがあった。

—— 遺伝って偉大だよなあ、マジで。

まあたとえそれが抗えない現実だったとしても、だ。

高校一年生の私としては、突然変異で急成長する可能性もまだまだ捨てきれない以上、あんなふうにあからさまにがっかりされてしまうとカチンと来るわけですけどね！「そうだよね……余計なことを知って絶望の中で光を見出せず朽ち果てていく人生って、やるせないだろうしね……」

「嫌なこと言うなよ!?!」

「あははっ！ でもさ、知らぬが花つて言葉もあるし、聞かないほうが京くん的にはいいこともあるんじゃないかな？ しよせん別の世界のお話だし」

私はお母さんのことが好きだけど。出来ればこの世界でもお父さんとお母さんが結ばれて、私とは違う私が生まれてきて思う存分幸せを享受して欲しいとも思うけど。

この世界にとってお客様かりそめに過ぎない私が、その願望に向かうよう露骨に誘導するような真似はしないほうがいいのだろう。

……まあ、そうならない程度に周囲を引っ掻き回すのはとても楽しそうだけどね。くふふ。

「はあ……先が思いやられるわ、いやマジで」

「それに関しては同意しとく。色々と頑張っつてね、お父さん」

「ぐぬ、他人事だと思いやがって……まったく可愛くない娘さんですね、お前は」

「親の育て方が良いのでー」

えへん、と胸を張ってみる。褒めてあげたはずなのに、どうしてかお父さんは頭を抱えて深い深いため息を一つ。

「……娘の教育はきちんとするよう気をつけないとダメだな、こりゃ」
どういう意味だね、それは。

翌日、一家団欒つぽい朝御飯を終えてお父さんが学校に行くまでの間二人でリビングでテレビを見ながら寛いでいると、今日の星座占いのコーナーが始まった。

私の誕生日は十二月二十日なので、見るべき部分はいて座ということになる。

十一位から順番に発表していくそれを該当の星座が出てくるまで横目で流し見しつつ、ふとあることに気が付いた。

「そういえばさ、京くんって誕生日二月だしいま高校一年生なら十五歳なんだよね?」

「ん? ああ、そうだけど。それがどうかしたか?」

「てことは……もしかして私のほうがお姉ちゃん? ほら、私十二月生まれだから同い年でも私のほうが上だよね」

「……はっ」

「いやいや、そつかー。それじゃしょうがないなあ。私のことはおねーちゃんって呼んでくれていいんだからね?」

「アホか！ 三ヶ月も変わらないだろ！ ったく……学校行ってくるから大人しくしてろよな。あと可愛がるのはいいけどあんまりカピィを追い掛け回してやるなよ」

「はーいパパ。いつてらっしやーい」

『今日の一位はいて座の貴方！ 街中で思わぬ出会いが待っているかも!』

テレビの向こう側から聞こえてきたその声を聞きながら、今日は一日いい事がありそうだと鼻歌交じりで手を振る私だった。

第08局：邂逅@懐かしき人との再会

人間というのは慣れる生き物であると、昔の偉い人は言ったとか言わなかったとかなるほど。これまでの人生の中で、今ほどにその言葉を実感したことは無かったかもしれない。

この不自然なバランスにも平然と対処できるようになるものなんだなあ、と自分自身の逞しさに半分は感心を、もう半分を辟易としつつも。正面に座ってチョコレートケーキを頬張っているお子様に問いかける。

「——で、城菜ちゃんさん。カナちゃんほごしやのひと先生は何処に行ったのか分からないの？」

「さっぱりわかんないし」
「あ、そう」

これは問いかけても無駄だな、と瞬時に悟る私はきつと賢い。

まあそれは当然、誰にだつて幼い頃というのがあるのは理解しているよ？ でもさ、これはないんじゃないかなーつてため息を吐くくらいは許されても良いと思うんだ。

トシさんが岩手に帰る前に『これだけは守るように』と私に言い残して行ったことが、

主に二つある。

一つは、私が持ってきた例の麻雀牌。あれを肌身離さず持ち歩いておくこと。万が一アレを無くすようなことにでもなれば永遠に元の世界に戻れなくなるかもしれないから気をつけなさい、と物凄く神妙な面持ちで釘を刺して行ったところをみるに、私にとって非常に重要なキーアイテムだという認識をしておいて損はないだろうと思う。

でもさ、私ってそんなにズボラな感じに見えるんだらうか？ 見えないよね？

若干物申したいことはあつたんだけど、とりあえず領いておいたのは正解だった。下手なことを言っただけを落とされるのはゴメンだし。

肌身離さずとなれば、思い浮かぶのはアクセサリーとして身に着けておくこと。

といっても麻雀牌そのものに穴を開けたり傷をつけたりするわけにもいかないのさ。さよちゃんを作ってくれた小さ目の巾着袋の中にそれを入れて首からぶら下げておくことにした。これなら滅多な事がない限り無くすようなことはないはずだ。

もし落としてしまうような事があつたとしても、ここならばきつと胸の谷間に引っかかって無くならないで済みそうだしね！

「お前、そのスタイルでよくもまあ……あー、うん。素通りせずに止まればいいなー」

「棒読み過ぎる!!? っていうかそこはツッコミ入れちゃダメなところだよ、京くん……」

「おおそうか、悪い悪い」

まったく悪びれているように見えないんですけどもそれは——って、今はお父さんとの掛け合い漫才を思い出し出している場合じゃないんだっけか。

コホン、と咳払いを挟みつつ。

で、もう一つ。個人的にはこちらのほうが問題が大きいと思わなくもないんですけど……。

未来——というか別の世界というか、そつちで出会ったことのある人物ともしこちらの世界で出会ったとしても、特別おかしなりアクションを取らないようにすべし。

例外として認められているのは須賀家の人たちだけであって、他の人に関しては面識があろうと無かろうと知らぬ存ぜぬで押し通せというのだ。

私ってそこまで器用な生き方をして来たわけじゃないから、ついぼろつとやつちやいそうで怖いんだけどね。

結論から申し上げるとするならば。その時の私の予感は、きつちりとの中してしまつたことになる。

さよちゃんと一緒に生活用品のお買い物を買った後、散歩がてら本を買うため駅前を一人で歩いていたら時にふとある女の子の姿を見かけた。

その子は周囲の人の流れなんてものともせず、ただひたすら喫茶店らしきお店の

ショーウィンドウとにらめっこを続けており、その執念たるや動かざること山の如しといわんばかりの迫力がある。平日の夕暮れ時には溶け込み辛い、なんとも珍妙な光景がそこにはあった。

迷子なのかなと思わなくも無いけど、普通ならば声をかけたりはしない。最近の情勢でもしそんなことをしようものなら、即座に保護者のお母様方のメール宛に『不審者情報』として送信されてしまうからだ。

不審な女が幼女に声をかけて回る事案が発生——なんてことになりでもしたら目も当てられぬ。

まあその子も迷子にしては動じないし、誰かお連れの保護者が来るのを待っているんだろうなと一人頷きながらその後ろを通り過ぎようとした時、

「お腹すいた……」グウウウウウウ

という、蛙の鳴き声のような切ない効果音と共に幼女がぼそりと呟いたのだった。

涙目でこちらを伺うその子の情熱に負け、手を引いてそのお店の扉を潜つたのがつい先ほどのこと。

もし保護者の人が探しに来ても分かりやすいようにと窓際の席をぶんどって、おやつ代わりにケーキを注文して名前を聞き出したらあらビックリ。なんとその幼女の名前

は池田城菜というらしいじゃないですか。

城菜さんといえば、幼稚園の年少の頃に担任をしてくれていたカナちゃん先生こと池田華菜先生の歳の離れた妹さんで、たしか三つ子の末っ子だって言ってたかな？

……なんていうか、独特な間合いを持つている人で、四人の姉妹の中だとたぶん一番おっとりとして大人しいタイプの人だったような記憶がある。

彼女と私が最初に出会ったのは、長野に引越してきてまだ間もなかった頃。今回は真逆のシチュエーションで、街中でお母さんと逸れ一人迷子になっていた幼稚園児の私を見つけて助けてくれたのが、当時中学生くらいだった城菜さんで。お母さんが半泣きになりながら無事見つけてくれるまでの間、ずっと一緒に遊んでくれていた。

その人が実はカナちゃん先生の妹さんだと知ったのはだいぶ後になってからのことだったけど。

一人取り残されて心細い中で見せてくれたあの柔らかな笑顔が、どれだけ嬉しかったことか。小さい頃のこととは大抵うる覚えな私をして、その時の気持ちは今でもはつきりと覚えていたりする。

……まさかその恩人と、よもやこんな形で再会することになるとは夢にも思っていなかったけどね！

「一人で来たわけじゃないんだよね？」

「ひなとなずなど。あといけだせんばい」

「いけだせんばい……って、それカナちゃん先生——じゃないや、君のお姉さんのことじゃないの？」

「そうともいうし」

「あ、そう……」

なんだろう、このひたすらに疲れる感じ。何故姉のことを先輩呼ばわりなんだろうか。

カナちゃん先生自身がそう呼ばせているのだとしたら……あの人はいったい何をやっているんだろう？ 趣味？ だとしたらちよつと見方が変わつちやうなあ……。

そんなことを考えながらウィンドウの外に視線を走らせていた時、挙動が猫チツクな一人の高校生と視線が交錯した。その人は私と、その差し向かいでケーキを食べている幼女とを見比べた後、風のような速さで視界から姿を消した。

ふう、ようやく保護者の登場か。

「——城菜っ！」

その人はお店に入ってくるなり目の前の幼女の名前を叫びながら、こちらへ向けて突進してくる。

ああ、うん。あの無駄にパワフルなところ、間違いなくカナちゃん先生だ……なんか高校生のコスプレしてるみたいだけど。

「おねーちゃんきた！」

「あれだけ迷子にならないように気をつけろって言うておいたのに！ ていうかなに呑気にケーキなんか食べてるんだよ、お前……」

「あー、お腹が空いてたみたいだったので。すみません」

「……誰？」

「通りすがりのものです。あの、とりあえず状況を説明するんで、落ち着いてお水をどうぞ」

「おお、悪いね」

受け取ったコップを遠慮なく飲み干すカナちゃん先生……もとい、池田さん。それも一応年上だから私も城菜さんに習って先輩と呼ぶほうがいいだろうか？

……まあどっちでもいいか。みつぽ先生ならともかく、カナちゃん先生だしな。

心の中でちよつとだけ失礼なことを考えつつも、かくかくしかじかとこれまでの経過をこと細かく説明してみたところ。

それまで怪しい人物でも見ているかのように怪訝そうな表情でこちらの様子を伺っていた池田さんも、さすがに状況を理解して私がここに不本意な形で足止めされている

理由も正しく把握してくれたのだろう。申し訳なさそうに頭を下げながら言った。

「なるほど……ウチの城菜が手間かけさせたみたいで申し訳ないし。世話してくれてありがとうな」

「いえ。私も昔似たようなことがあつた時に助けてもらった事があるんで。そのお返し——でも思ってもらえれば」

「お返ししつつても、こいつに返すのはなんかおかしい気もするけど……まあいいか。ケーキ代はこつちが持つから、もう一つくらい頼んだらいいし」

「それはさすがに——って」

そういえば残りの二人はどうしたんだろうか？

城菜さんの話だと三人とも一緒にいたというような話だったはずだけど。一緒に連れてきているようには見えない。

「ああ、それなら部活の友達に面倒見てもらってるから平気だし。携帯で連絡しとけば少し遅れても大丈夫だろ」

「はあ」

そういうことならお言葉に甘えて。

城菜さんが一心不乱にチョコレートケーキを崩壊させるべくフォークを片手に襲い

掛かっているその真横で、私たちは世間話を交えながら親交を温めていた。

「どうやら池田さん、麻雀部に入っているらしい。誰も彼もが麻雀色に染まっている現状に、少しだけ頭を抱えたくなる自分がいた。」

まさかカナちゃん先生の口からその単語を聞かされることになるとは思っても見なかった。これで見つぽ先生まで麻雀やっていたりなんかしたらもはや笑うしかないレベルだね。

そんな内心の辟易した感情を一切表に出すこともせず、ニコニコと話を続ける。

「へえ——池田さん麻雀部の大将なんですか。それにしてもその風越女子って高校、毎回県大会の決勝に残れるなんてよっぽど麻雀強いんですねえ」

「当然どこよりも強いし！ ていうか長野県の高校に通ってて風越の名前を知らないってのは正直どうかと思うけど」

「あー、私はつい最近越してきたばかりで。あと麻雀にも疎いし」

「そうなのか。転校ってことはこのへんの学校に？」

「はい。清澄高校つてところに入ることになってるんです。清澄、知ってます？」

「清澄……？ んや、聞いたことないし……そこって麻雀部はあるのか？」

「んーと、たしか……人数が足りないから困ってるっぽいことを部長さんらしき人が言ってたような気がしたような」

あの日、たしかに竹井アナがそれらしいことを言っていたような気がする。まあ、私にはあんまり関係の無いことだけでも。

「ふうん。それなら私が名前を知らなくても不思議は無いな」

「池田さんはなんもかんもまず麻雀ありきなんですね……」

「ふん、そんなの当然だし」

そうやってめいっぱい胸を張られても反応に困るんだけど。

うーん、あのカナちゃん先生がどうしてこうなった……？

いや、まあ、あの当時から思い込んだら一直線的——猫まつしぐらのなどはあつたかもしれないけどさ。それにしてもこれは酷い。

もしやこの世界の人は全員こんな感じで麻雀毒にでも侵されてしまっているのだからか？

しかもそれが空気感染でもしようものなら大惨事である。気分はもはや「こんなところにいられるか！」私は部屋に戻らせてもらおうぞ！」と叫び出すモブのそれとほぼ重なっていた。

ちようど城菜さんもケーキを食べ終わったみたいだし、そろそろ席を立たないと取り返しの付かない事態になりかねないということだ。

会計を池田さんにお任せし、そのまま別れることにした。

「まあ、清澄だっけ？ 人数が揃って県大会に出られるようになるといいな。ま、優勝するのはウチだけだ」

「あはは。まあ、部長さんに会うことがあつたらそう伝えておきますよ。あとケーキご馳走様でした」

「いいって。んじやな」

「おねーちゃんまたね！ バイバイ！」

「城菜ちゃん、バイバイ」

帰りしなに本屋に寄って、気になっていた本を手を取った。お母さんの趣味だと思っただけ、我が家に全巻揃えて置いてあつた向こうでもよく読んでいた小説で、この頃から出ていたのかと思うと実に感慨深いものがある。暇つぶしにはちようどいいだろうと思つて購入を決めた。

レジにそれを持っていく途中、ふと目に付いたのが一冊の雑誌。タイトル部分には『WEEKLY麻雀TODAY』と書かれており、一目見た瞬間にそれと分かる麻雀の特集雑誌だった。

……こんなところまで魔の手が忍び寄っているなんて。

気にしたら負けだと思いつつ、視線を切ろうとした瞬間に飛び込んできた文字列に興味を引かれ、ついついその雑誌を手にとってしまった。

毒されてきたかと思うものの、好奇心は止められない。

そこには、何処かで聞いたことのある名前が確かに刻まれており。

「……白糸台高校の宮永照、大会史上初の団体・個人三連覇へ向けての、特別インタビュー……？」

第09局：編入@私と彼と幼なじみと

似て非なるこの世界で、失われたかつての日常と同じ道筋を歩く意味があるとするならば。

それはたぶん、自己満足以外の何者でもないのだろう。

ある登山家は言ったという。

何故山に登るのかと問われ、そこに山があるからだ。

それはある意味で、究極の自己満足といえるのではないか——？

「ワケの分からないことばつか言っただけで、ほら。さっさと行こうぜ」

「はあ」

簡単に言っただけで、今日は私が再び清澄高校へ通うことになるその第一歩目、記念すべき日だということ。

あ……学校行きたくないでござる。

何が嫌って、まずこの世界のこの時代に本来いないはずの私の足跡を学歴という形で残してしまうことである。

なんていうか、それを考慮に入れたうえで学校へ行けという指令がトシさんから出さ

れたということは、だ。今すぐに元の世界に戻ることはできないからきちんとした生活基盤を手に入れておけ、といわれているようでなんか切ない。

原因が不明な時点でそれは当然そうなんだろうけど……万が一にも明日戻れることになつたら、私がいなくなつた後学校側にどう説明するんだと。

まあそうなつたらもう向こうに戻つた後の私にとつてはまるで関係のない話になつちやうんだけどさ。

実は私、祖父母の家から清澄に通うのは今日が地味に初めてだつたりする。

今は亡き（というかまだ建てられてすらいない）マイハウスは駅を挟んだ向こう側にあつたから、こつちから通つた方が距離的には近いっぽいんだけどね。

いつも通っているものとは違う通学路、とはいえ幼稚園の頃から見慣れた風景ではあるけれども。それでもこうして二人で並んで歩いていると、どことなく新鮮な気がしないでもないから不思議だ。

「そういえばお前、向こうで咲と顔見知りだつたりするの？ 面識有りそんな清澄に通つてる知り合いっつーとあいつくらいだと思うんだけど」

「うん？ 咲ちゃんつていうと……ああ、京くんの幼なじみの宮永咲ちゃん？ うーん、向こうだとたぶん会つたことないんだよね、私」

「たぶんっ」

「私のお父さん、ちよつとした有名人だったから。小さい頃つていろんな人がうちに遊びに来てたし、正直今でも顔と名前が一致しないどころかたぶん名前そのものを知らない人もけっこういるんさ」

「へえ」

超絶に人見知りするお母さんはともかくとして、社交的なお父さんのほうは特に知人友人が多い。

ただ、その中で『みやながさき』という名前を直接両親から聞いたような覚えはないから、おそらく面識はなかったはずだと思う。

でも、こつちでそんな親しい間柄だったとするなら、向こうでそうじゃない理由つてあんまない気もするよなあ。

さよちゃんの口ぶりから推測するに、こつちの世界の二人は結構仲が良いっていう話だったはず。

もしかしてだけど、向こうの世界の二人の間には何か疎遠になるような事件でもあったのかな？

うーん……まあ実際にその辺がどうなつていのかは分からないけれど、最近では『幼なじみは負けフラグ』つて含蓄のある言葉もあるくらいだし。ぽつと出のお母さんに搔つ攫われたとしても仕方ないよね。

「……って、いやちよつと待てよ。それってつまり今後俺が有名人になる可能性もあるってことか？ モテモテ人生!？」

「あー、京くんの場合そのルートはもうフラグがポツキリへし折れちゃってるからたぶんムリムリムリのかたつむり」

「マジで!？」

「本気と書いてわりとマジで」

がつくりと肩を落とすお父さん。まあ、サッカーやってない時点でこの世界の未来に残されているルートなんてお察しだよな。

「お前の世界の俺っていったい……っ？か何やったらそんなことになるんだよ?！」

「サッカーだけど？ 私がちようど幼稚園児やってた時代だったと思うんだけど、たしか日本代表だったこともあるはずだし」

「日本代表……だと!? 俺が!？」

「サポの人たちからは不動のセンターバックって言われてたっばいね」

何気にうちのリビングには東アジア選手権やらの優勝メダルが飾られていたりする。

「こっちの世界だとハンドボールやってたんだっけ？ なんで高校で続けなかったの?！」

「……んー？ まあそれは、なんだ。ちよつとばかし色々あつてな。どつちにしろハン
ドじや日本代表にやなれねーし今更それは関係ないだろ」

「ふうん、そうなんだ」

いかにも興味なさげに、何気ない感じで視線を空に向けて飛ばしたその仕草を見て、
頭の中に警鐘が鳴り響く。

あ、これもしかして地雷踏んだ感じ……？

空気の变化を感じ取つて話題そのものを丸ごとスルーしてみたものの、どうにも微妙
に機嫌を損ねてしまったらしく、そのまましばらく無言で歩く二人。

そのままの状態、やがて学校の正門が見える所までやつて来た時、少し前に行く、本
を読みながら歩いている一年生らしき女生徒の後ろ姿が目にとまった。

よくもまあ歩きながら本を読めるもんだと半ば感心、半ば呆れながら何とはなしにそ
の光景を見ていると。

「よう咲、おはようさん」

隣を歩いていたはずのお父さんが小走りで彼女に近づいて、下を向いた状態だった頭
をガツチリ掴んで軽く揺らしながらそう言った。

「~~~~つ!? って京ちゃん? お、お早う………つていきなり変なことするの止めて
よ!」

「お前が本読みながら歩いてるからだろ。マジで危ねーからそれ止めろって昔から言っ
てんだろーが」

「うっ……だつて昨日寝る前に読んでただけど、続きがどうしても気になっちゃつて
……」

「せめて教室に辿り着くまで待てんのかい、このアンポンタン。ただでさえどんくさい
のに、そんなアホなことやって交通事故に遭いましたーなんてことになったら洒落にも
ならんっちゅーの」

「……むっ。いくらなんでもそこまでポンコツじゃありませんよーだ」

「あんなあ、ポンコツつてる奴ほどそう言うんだって台詞を知ってるか？ だいたいこ
の数十年間の間に歩きスマホで何人の人間がお亡くなりになってると思ってるんだ」

「そ、それは……えと、何人くらいいるの？」

「いやそれは俺も知らんけど。そんな間抜けな人間って一体世の中にどれくらいいるん
だろうな？」

「うーん……あつ、そうだ。京ちゃんケータイ持ってたよね？ ちよつとそれ使つて調
べてみてよ」

「おう、その手があつたか。オツケー、んじやさつそく——」

「——つてダメじゃん！」

途中まで普通にお説教していたはずが、なし崩しに彼女のペースに巻き込まれ、取り込まれてしまうお父さん。その無様な姿に、傍観者を決め込んでいたはずにも関わらず思わず普段どおりのツツコミを入れてしまった私である。

ミイラ取りがミイラになるにも程があるつてもんでしようよ……。

「ん？ どうしたんだ、いきなり大声出して？」

「歩きスマホダメ、ゼツタイ！ って言つてたの京くんでしょー？ なに普通にポケットから取り出して操作しようとしてんのさ、このポンコツが」

「おい待て。誰がポンコツだ、誰が。俺を睨と一緒にしないでくれ」

「ふうん——あんねえ、ポンコツってる奴ほどそう言うんだって科白を知ってるかい？」
「ぐっ……」

ニヤニヤしながら一言一句違わぬ科白をお返ししてやると、さすがにぐうの音も出なかったらしく黙り込む。勝ったね。

「つて、そつちの子はそつちの子で、なんでそんな怯えてるかな？」

「えっ!? いえ、別に……怯えてなんていませんよ?」

なんて言いながら、ちゃっかり図体のかいお父さんの後ろに半分隠れてしまっているのはどういう見なのかしら。

いささかムツとしてしまうけど、それはまあ若干ファザコン気味な私なのでどうか許

してもらいたい。

ちよつとばかりの嫌味を込めてチラリとお父さんのほうへ視線を送ると、呆れたようなため息と一緒に隠れていたその子をこちら側に押し出してきた。

あわあわと慌てた様子ではあるけれど、さすがに初対面の相手に対して態度が悪いと改めたのか、すぐさま大人しくなる。

「あー、咲。こいつは俺の親戚でな、今日から清澄に通うことになってんだ。ほれ、隠れてないで自己紹介しなさい」

「ふえつ、わ、私から!? えーつと、その……初めまして、宮永咲です。よ、よろしくお願ひします?」

「何で最後疑問系なんだよ……ってまあそれはいいか。んじゃ次はそっちな」

「ほいほいっと。初めまして、私は須賀調つていいいます。京くんと同じ苗字だし、呼び辛かったら調ちゃんって呼んでね。この人とは従姉弟同士なの、こちらこそヨロシク」

「う、うん。よろしくね、調ちゃん」

「この人って何だよ……でもま、同じクラスになるかどうかはわかんねーけど、なったら仲良くしてやってってくれよな」

「あー……うん。分かったよ、京ちゃん」

うん、明らかに乗り気じゃないって分かる返事をどうもありがとうございます。

ていうか、これが噂の宮永咲さんですか……なにこの警戒心バリバリな小動物っぽい娘さんは。

なんとか自己紹介まで漕ぎ着けたのはいいけれども、仲介人がいない状態で仲良くなる気がほとんどしないんですけども。

若干コミュ障っぽい感じだけど、お父さんみたいな世話焼き人間にとつては放つて置けないタイプとでもいうのかな。

ああ、でも冷静に考えると、そこら辺はもしかするとお母さんとよく似ているタイプの子なのかもしれない……と思えば、まあちよつとは仲良くなれる余地はありそうかも。

その手の人の扱い方は先駆者からきつちりレクチャーされているから対応もバツチりだしね。

「ああ、そうだ。あのね、宮永さん。ちよつとこれ見てほしいんだけど……」

せつかく仲良くなるチャンスを逃すのもあれだから、気になっていた話題を出してみる。

お父さんの友達ならどうせ知り合うことになるだろうと考えて持ってきていた例の雑誌を鞆の中から取り出して、

「ここに載ってるインハイチャンプの宮永照さんって、宮永さんのお姉さんってことで

間違いないんだよね？」

「——!？」

差し出した瞬間に、表情が凍り付いて動かなくなる。

……あつ、やつちまつたかなこれは。

そう気が付いた時には、周囲の空気は非常に重苦しいものになってしまっていたのだった。

本日二回目の地雷原突入。

朝っぱらから盛大に何をやっているんだと思われるかもしれないけど——これは正しくお母さんの血筋である証拠なのだから、最早仕方がないのである。

やっぱりこれ、仲良くなるのは無理かもしれないなあ……なんて思いつつ。

とはいえ今更引つ込めるわけにも行かず、雑誌を手にしたまま微動だにしなくなった宮永さんからの返事を冷や汗ダラダラで待っていると。

「おーい調。世間話もいいけど、お前職員室に顔出さなきゃいけないんじゃないやなかったか？ 時間ないし、さっさと行った方がいいぞ」

「え？ あ、うん……そうだね、そうしよう」

微妙な空気を読み取ってか、お父さんがナイスタイミングで戦線離脱の切欠を与えてくれた。

これ幸いにと雑誌を回収するのを忘れてその場から逃走する私。あとはお父さんが何とかしてくれるだろう。たぶん、きっと、めいびー。

……そんなことを考えていたバチでも当たったんだらうか？

「えー、今日からこのクラスに転入することになった須賀調さんだ。勝手の分からないこともあるだろうから、皆仲良くしてあげるように」

「須賀調です。これからよろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げて、顔を上げる。

その先には、何ともいえない表情のままこちらを見つめている、宮永咲の姿があった。